

第十二章 大陸の北と南では

満州の牡丹江で関東軍歩兵に配属された萌ゆる大空は伍長から軍曹に昇進し、開拓団護衛のために巡視の任務に当たっていた。

南支、北支の最前線で任務を全うしてきた休息の意味合いもあるのかな？と萌ゆる大空軍曹は考えていた。それならほどなくまた厳しい戦線に投入されるはずだと予感していた。

水が十分にある地帯なので水田も耕作されたが、まだ寒さに耐えうる稲の品種が作られておらず、広大な耕地を手に入れたものの開拓民の生活は決して満たされてはいなかった。収穫の頃になると馬賊と呼ばれる騎馬団が襲撃してくるので、開拓農民たちも自警団を作ってはいたものとても対応できる状況ではなかった。

日本国内の余剰労働力を満州蒙古の開拓に移民させる政策は当初の頃は意味を持つていたが、日中戦争がはじまると兵役にとられる人数も増え、日本の本土、特に農村は耕作者不足が深刻になってきたにもかかわらず、国は満蒙開拓団の数を減らそうとはせず、各農村ごとに開拓団を出すよう指示したが、それでも募集人に間に合わず農業経験のない都市部住民まで移民団に加えて満州に送り込んだ。戦中の食糧不足は一度決定したことは覆せない政策の誤りもあったと言えよう。

部下四人を引き連れて開拓団の警備に赴いた萌ゆる大空軍曹は、警備隊の宿舎で交代する隊員から引き継ぎをすませると、サイドカーに乗って一帯を回った。大陸勤務が長い萌ゆる大空軍曹もあきれられるほどの広い耕作地。いったいこの人数でどうやって守ればいいんだ？と気を病むほどだった。

宿舎に戻ると、農作業を終えた開拓団の青年が来ていた。村ごとの移民ではなく満蒙開拓青少年義勇軍でやってきた左右翼(ひだりうよく)という青年で、開拓団では「ウヨク」さんと呼ばれていた。

満蒙開拓青少年義勇軍と言うのは満州と蒙古(モンゴル)に開拓団として入植する十六歳から十九歳の若者を送り出す機関のことで、決して皆さまがご想像なさっているようなお下品な意味を持つ組織ではありません。

馬賊は夜陰に乗じて開拓地に入り込んでくるが、柵を巡らせているので、進入路はいくつかに限定できることや、馬賊以外にも匪賊になった土着民や、地理的に近い朝鮮から日本人になりすまして盗みや略奪に来る連中がいることなどを説明した。

とは言え、この面積にこの人数では人の手が足りないと言うのは警備の農民の認識も同じだった。

馬賊と言うのは今でいう遊牧民のことで、これらが全て敵対していたわけではなく、一部に馬を操りその行動力で強奪などを繰り返す一団がいたわけである。

彼らは日本からの移民が自分たちの土地を奪ったと主張しているが、実際はほとんどの農地は元々あった農地を買い取って開墾して広げたものだと言うことはあまり知られていない。

その夜、萌ゆる大空軍曹は部下を連れて馬賊が出そうな場所に行って待ち伏せをした。月の出していない夜だった。

収穫の終わった季節は日本ならまだ涼しい気候だろうが、満州は秋を通り越して一気に冬になる。狙われるとしたら収穫した穀物と野菜をしまつてある倉庫だろうから、犬をつないでおき、護衛を左右翼たちに任せて、四人の部下を連れて外で待ち伏せをした。

深夜、馬の蹄の音が遠くに聴こえた。人間なら抜き足差し足忍び足もできるが馬はそれほど器用ではない。

「いよいよおいでなすつたか。吉野上等兵、鋤矢一等兵配置に付け。」

部下を配置につかせ振り向くと、近くにいる仲卯一等兵の背後に人影のような物を発見した。星の光でうつすらと斧のような刃物を大上段に振りかざす姿が萌ゆる大空軍曹の目に入った。

「仲卯逃げろ！」

と、小声で指示を出すと、銃剣の先でその人影の胸のあたりを一突きした。萌ゆる大空の足元にその影が手にしていた斧が落ちた。

馬の足音に耳を澄ませていた吉野上等兵の目の前にも巨大な馬が出現し、慌てて発砲してしまった。馬は前足を持ち上げて転倒し、人が逃げる姿がおぼろげにわかった。

「しまった！」

萌ゆる大空軍曹は部下たちを積み上げた土囊の影に非難させた。案の定、馬賊たちも鉄砲を持っておりこちらに向かって発砲はしてくるが、向うもこちらの居場所が特定できないらしい。

倉庫の屋根に待機していた狙撃手の松屋上等兵は発砲の時に見える火花で敵の位置が特定できたが馬に乗って動いているのでなかなか狙いが定まらない。やみくもに打つと向こうにこちらの位置が知れる。

三発ほど撃つと、敵方の銃声が止んだ。当たったのか？それともこちらの出方を待っているのか？そのまま夜が明けるまで身動きもできずに闇とにらみ合った。

緯度が高い北の土地では秋分の日を過ぎると日の出も遅い。まわりが見えるようになったのは七時を回っていた。

視界が開けると左右翼たちも外に出てきた。倉庫の屋根にいた松屋上等兵は見える限りの範囲に賊がないことを確認した。

闇に乗じて萌ゆる大空軍曹たちを狙おうとした斧を持った男に左右翼は見覚えがあった。収穫を手伝っては食料をもらっていた朝鮮人だった。

こうして開拓団の村に潜り込んで賊を手引きしていたのだろう。

吉野が撃つた馬は二十mほど離れた場所に倒れて息絶えていた。

松屋上等兵が狙撃した先には満人と思われる賊が一人息絶えていた。

軍服を着ていない者と戦闘になることを萌ゆる大空軍曹は快く思えなかったが、法があっても機能しないこの大陸ではこうした戦闘があまりにも多すぎた。

軍服を纏った正規の兵は日本軍が行くと我先に逃げるが、民間人だと安心しているといきなり発砲してくる。便衣兵と呼ばれる一種のゲリラだ。

常に強い立場に身を置いておかなければいつ殺されるかわからない土地だった。

「人間は役に立たないが、生きてる馬ならば畑で使えただけどなあ。」

左右翼は馬の亡骸を見て残念そうに言った。軍馬にもなったよと萌ゆる大空軍曹も思った。

「馬の供養をしましょう。馬を食うのは戦友を食うみたいであまり気持ち良いものではないが、馬殿に敬礼！」

萌ゆる大空軍曹は吉野、松屋、鋤矢、仲卯達に命じて馬の処分をした。彼らは実に手慣れた手つきで馬を調理した。

その頃、上海では大きな動きが出ていた。ある日突然、二人黙るのお。ではなく、ある日突然与一君が店を閉めて姿を消したのだった。

須田のオジキのキャバレーサンケイでダニー啓から大連に向かうよう指示が出たため、荷物をまとめて船で大連へと向かった。

与一君が姿を消した頃、上海のフランス租界のレストランで支那人十二名が不審な服毒死をとげた。フランスのコミンテルン経由でソビエトからの資金のやり取りがあったことが分かったのだが、死んだのが支那人だったので問題にはならなかった。

アメリカかイギリスの工作員が動いたのではなからうか？と噂が立ち、シヨウ・チャンツーは与一君の工作活動と受け止めていた。

上海の市場でフランス人シェフと親しくなった与一君が、フグの調理法を教えに行ったのだが、たまたま与一君がさばいて調理したフグは成功して「おいしいじゃん！」と二人は大喜びをした。

手先は不器用だがプライドの高いフランス人シェフは、フグの調理法を憶えたような気になつて調理して出してみたたら大失敗だった。

たまたまフグに中つて死んだのが、何でも食べる中国共産党員だったから「よかつたんじゃないっすかあ？」と言うことになり、「私もそれを狙つてフグを出したのさ。」と開き直るフランス人シェフだった。

同じ頃、赤井五平二等兵を教育するためにシヨウ・チャンツーは四川省にいた。

国民党を正規軍とするならば、ゲリラと呼ぶべき共産党の八路軍が地方で暗躍しており、その工作活動のため地方を転戦することになったのだ。

四川省ではシヨウ・チャンツーと赤井五平は郵便配達の親子となつて犬の「次男坊」を連れて山間の村を回つた。映画、「那山、那人、那狗(この山、この人、この犬)」。邦題「山の郵便配達」のモデルは意外にも日本人だった。

山岳地まわりの郵便配達を終え、重慶に近い山村のプチカフェラス風の野外食堂で激辛四川料理を食べていた。

四川料理特有の八角と言う香辛料を使った料理にも、辛さにもすっかり慣れた赤井五平は中国人の所作も様になつていた。

この任務を終えたら北京に向かう計画だったので、重慶に入ったら少し体を休めて身なりを整えて出かけようなどと相談した。

「ウーピン。私の斜め後ろにいる女に注意しろよ。」

「ええ女ですなあ。山から下りて来るとみんなベツピンはんに見えるけど。」

「よく観察しておけ、この辺の人間ではない。顔つき、歩き方、もつと北の人間だな。」

「そう言えば背が高いし、色も白いなあ。」

「ほら、あまりきよろきよろ見るな。」

とシヨウ・チャンツーが注意した時にはすでに赤井五平と謎の女の目は合ってしまった。嬉しそうににんまりする赤井五平であった。

謎の女も「このあたりの人間ではない」と感じていたが、山岳民族は日本人に顔つきが近いし、およそこんな汚い格好をした親子など中国人だつてめつたに見かけなかったので、山奥から出稼ぎにきた親子か？と思う程度だった。

シヨウ・チャンツーはもう少し深く考えてみた。

「こんなところに地元の間でもない女が紛れていると言うことは、八路軍か？だとすると、ここに日本軍が来る。便衣兵か？何のため？そうか、日本軍を襲つて地元民に発砲させ怨恨をあおる。そこに八路軍が入り込むと言うことか？相変わらずずるい手を使うもんだ。」

独り言のようにボンボンとつぶやいた言葉を赤井五平はしっかりと把握していた。身なり所作でこのあたりの人間ではなさそうな人物は五人。

「ところで、何で便衣兵いわはんのや？腹下しとんのか？」

「便意じゃないのね。便衣つて書くんだよ。普段着の兵隊ね。覚えようね、漢字。」

「掌がグーで、拳がパーやつたつけ？逆か？チョキはなんや？掌はこぶしやつたか？」

日本軍のトラックが一角に停車した。

「まずいタイミングで来てしまった。」

「まだチャーハン食べ終わつてへんもんなあ。」

「たまごスープもだ。」

不穏な動きはしないに越したことはない。なに、バレたところで同じ日本陸軍と言う安心感もあつた。

トラックを下りて料理屋に向かつてくる兵隊の先頭に立つ男を見て赤井五平はドキツとした。

「未造上等兵や。伍長はんに昇進したんかいな？上海に来る船で一緒やつた兵隊さんで、ごつええ人やねん。ああ、あかん。隙だらけやで。技術兵やつたからなあ。」

「お前さんだいぶ目がきくようになったな。」

日本軍が入つてくると、皆立ち上がつて両手をあげた。

「怪しいものはいないか？」と聞かれて私が怪しいですと言う馬鹿はいないに決まつてるが、先ほどの八路軍と思われる女が皿に饅頭を山盛りにして日本兵に持つて行つた。

伍長の階級章を付けた未造技師の前に立つと、シヨウ・チャンツーが柱に立てかけてあつた竹の棒でその手を叩いた。

皿の下にはピストルが握られており、すぐさま未造伍長の両脇にいた兵隊二人が銃剣でその女の胸を突き刺した。

未造技師は足がすくんだ。もしあの中国人がいなかったら殺されていた。と振り返るとす

でに姿が見えなかった。

「まだ四人おるで、男や。背中に赤い目印、八路軍！」

声が聞こえたが姿は見えなかった。だが、未造技師には聞き覚えがある声で、上海に向かう船の中で会ったけつたいな大阪の兄ちゃんを思い浮かべた。

「背中に赤いしみがついた男を捕らえよ！」

未造伍長が叫ぶと兵士たちはその場にいる中国人たちの背中を確認した。

騒ぎを聞きつけて他の家を回っていた日本兵もそこに集まり、背中に赤いしみがついた四人を即座に捕まえた。拳銃を向けてくるものもいたが、即座にその場で射殺された。正規兵と異なり便衣兵には捕虜になる資格がない。捕まった共産党軍の末路は知れている。

シヨウ・チャンツ―と赤井五平と犬の次男坊は疾走して村を抜け出した。

「日本軍が来て、何で日本軍人のわてらが逃げなあかんのや？」

「それよりウーピン、もつとスピードおとせえ。体型考えて走ってくれえ。でも、お前さんも腕を上げたなあ。あのださくさくさで赤い目印までつけてやるとは。ハアハア。」

「師匠にはかないまへんわ！どさくさに紛れてチャイナドレスの姉ちゃんのパンツぬがしだでしよ！」

「これか?!ハアハア。」

シヨウ・チャンツ―はポケットに隠していたパンティーを右手に持って走りながら振り回した。

その刹那。シヨウ・チャンツ―の手にあつたパンティーが何者かに奪い取られ、賊はそのパンティーを頭にかぶると、ものすごい勢いで走り去っていった。

「くせえ。めっちゃやくせえ。中国人、ダメだコリヤ！」

なんとなく楽しそうな出来事があるのでは？と重慶の端っこまで来ていた秋田のネロさんだった。犬の次男坊もネロさんにくつついて走り去っていった。

「返せ〜！パンツ返せえ！」

重慶を離れた二人は北京に向かうのだった。